

とができるようになった。

- ・「長所をどのように生かすか」など、責任を持って取り組むために自分ができることを振り返りノートに書いて取り組むようになった。
- ・「自分の障がいと向き合う時間も作ってくれたので、逃げずに障害を知って自分自身を知ることが出来て、少しずつだけ自分のことを好きになっていくことを学びました。」

生徒の記述内容からは、「障がいの自己受容・自己理解」、「他者意識と自己の立ち位置や立場の理解」、「役割の理解と責任」、「PDCAサイクルによる振り返りと課題の改善」、「長所への気付きと活用」などの向上が見られた。

⑤ チームワークの意識の向上

これまでの作業学習では、作業学習が教師に指示に沿った個人個人の作業となっていたため、チームで仕事をする機会が少なかった。

模擬株式会社になってからは、受注生産に伴って納期を守った製造や学科の定番製品の製造をペアやグループで協同学習を活用して取り組むようになったため、「自分は会社の一員である。」という考え方ができるようになってきたことにより、学級の仲間意識が強くなり、「チームで仕事をする。」「チームで活動する。」というチームワークの意識が高まってきた。

(生徒の記述内容に見られる変容)

- ・「報告・連絡・相談をどんなときでも使うこと、3つのことをすることで、上司や周りに人が困らないし、気持ち良く仕事ができることを知りました。3つのことはどんな場所でもやらないといけないし、やったほうが人との信頼、人間関係が少しでもつくことを」学ぶことができた。
- ・「今までよりも仕事や製品に対しての向き合い方が変わり、失敗をしたときに周りの人への被害の大きさが」が分かり、「より仕事に対しての気持ちの入れ方が」変わった。
- ・「どうしたら会社のためにつながる働きが出来るか考えるようになり、意識することが増えました。」
- ・「自分一人でこの作業が成り立っているわけではない。周りの人がいるから今があるんだと思うようになった。」
- ・「周りのために何かしたり、迷惑をかけたくないという思いを持つことで仕事をするときに意識や考え方がだいぶ変わりました。」

生徒の記述内容からは、「仕事をスムーズに進めるスキルを活用したチームワークの向上」、「他者を思いやった業務遂行」、「周囲の人への感謝」、「会社への貢献」などの向上が見られた。

2 模擬株式会社 IMAKANE FACTORYにおける指導の在り方に関する考察

今年度の模擬株式会社 IMAKANE FACTORY の取り組みにおいて、生徒に対するアンケート調査の結果を分析した結果を踏まえ、模擬株式会社 IMAKANE FACTORY の指導において、最も生徒の変容が得られた事例に基づいて、指導の在り方を次のとおり検討、整理した。

模擬株式会社における指導の在り方 (作業学習は「会社の仕事」であるとの認識を持つ)	期待される効果
・一学級を一つの組織として動かす。 ・これからの予定を提示して、生徒がどのときに何をやるのか計画を立てるようにする。具体的には、生徒が仕事の見通しを立て、終了期日を基に、製品1つあたりの時間と残り時間を考えた仕事の取り組みをする。生徒だけでなんでも進められるようにする。	・周りの援助がなくても動けるようになり自分のできることとできないことの区別ができるようになる。 ・作業の見通しを毎日書くようになり、製品1つを作ることに必要な時間が分かり

模擬株式会社における指導の在り方 (作業学習は「会社の仕事」であるとの認識を持つ)	期待される効果
- 組織図を使って、作業の全体量と分担、自分の担当業務が終わった後、だれにどのような協力をするのか、生徒が考えるよう促し、卒後の職場を想定した動き方で生徒が活動できるようにする。 - 業務量の全体調整は生徒が話し合って行う。 - 時間内に片付けや掃除を終わらせるように意識付ける。 「教師の指示を待って行う教師主導型作業学習」 ⇨「組織図を使って作業内容の全体量と個々の生徒の担当と分量が分かり、活動の意味理解の上に立った生徒が主体的に『会社の仕事』としてペアやグループを作って組織的に取り組む作業学習」を実施する。 - 受注生産を増やし、発注者との打合せを行い、求められる規格に合う製品を製造するなど、製造過程で顧客とのやり取りのある製造を基本とする。不特定多数を対象とする場合には、市場調査を行って製造する製品を決める。 - 学級を2グループに分けて仕事をするなど、卒後の職場をイメージできるようにする。 - 各教科の目標を書いて、できるようになるための手立てを考える。 - 自分の障がいと向き合う時間を設定し、自分のよさや課題を考えるよう促す。 - 今日の自分の給料はいくらになるか自己評価して計算して、給料を増やすための行動、仕事をする。 - 作業だけではなく、今日1日の振り返りを行い、作業もその他の学習や生活も社会人になる準備を行う。 - 作業学習中にメモを取るよう促し、寄宿舎の自習時間でメモを必要に応じて整理する。 - P D C A サイクルノートを作り、振り返る際には、P、D、C Aの各段階で何が良く、どこに課題があり、今後はどのように改善すると良いのか考えるように促す。 - 作業における課題と教科学習や他の指導における課題を関連付けて、生徒に意識付け、課題解決努力を促す。 - 作業を会社の仕事と考えて、製品を丁寧に、期日まで終わるように意識付ける。 - 発注者のことを考えて、丁寧に作ったり形やデザインにこだわって作るように促す。 - 新製品や新しい作業種を開発して、製品知識を増やし技能を高める。	- 自分の仕事のペースをつかむことができる。 - どのような意味があり、なぜ大切なのかも授業の中で学ぶことで、意味を理解して動けるようになる。 - 仲間とペアやグループを作って、会社の組織同様に動くことで、自分はどの立場にいてどんな仕事があるかすぐに分かるようになる。 - 全体のことをしっかり把握するために、自分から仲間に聞いて分かるようになる。 - 理解していることで、仕事が早く終わること、どんなときも理解していた方が、動きやすいことを理解する。 - 会社の仕事としての意識を持ちやすく、職場での動きを想定した学習になる。 - 職場での就労をする上で大切な観点を持って仕事を振り返ることができる。 - 自分自身の障がいとよさに気づき、自分自身をありのままに少しずつ受け入れることができるようになる。 - 効果的な振り返りを行うことができ、自分の障がいや課題を受け入れ、自分のよさと改善策に気付くことができる。 - 自己の失敗のパターンに気づき、考え方や行動を修正して、失敗しないように努力することができる。 - 購入者に喜んでもらえる嬉しさを感じ、仲間とコミュニケーションをしながら確実に仕事をしたり、より質の高い製品を作るために質問したり、調べたりする。

模擬株式会社における指導の在り方 (作業学習は「会社の仕事」であるとの認識を持つ)	期待される効果
- 会社として何が必要なのか考えるように促す。 - 報告・連絡・相談をどんなときでも行う。 - 作業学習で用いる考え方を教科指導においても関連付けて学習できるようにする。 (例) - 数学 「５０枚お皿を作る場合、合計何グラムの粘土の準備が必要か。」「３０枚お皿を受注した場合、どのように仕事を分担すると平等かつ確実な仕事ができるか。」「〇月〇日の締め切りにはどのような時間配分や作業量で仕事をしなければいけないか。」など、数学の時間で問題を解いた後に作業学習に取り組む。 平均の出し方を数学で学習し、その後の作業学習では仕事を平等に割り振るということを基本として、誰か一人にだけ負担がかかっていないかなどという視点と実際に誰がどう動くかという視点が良いのかという視点で考えるように促す。 - 国語 「報告・連絡・相談の各場面で誰にどのような言葉で伝えることが望ましいか。」、作文では、「文章表現や誤字脱字をグループでチェックし合い、整った状態の物を提出する。」といった組織図を生かすとともに、確実な仕事をするという意識と習慣をつけるための授業の工夫を行った。 他教科の授業でも作業学習の内容と関連付けて、「会社の仕事」を学ぶ場と押さえ、指導内容を構成すると、卒後の職場で活用できる知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習（仕事）に取り組む態度を育成できる。	- 会社として仕事をするにより、自ら会社の業務や仕組みを調べ、提案する。 - 報告・連絡・相談も仲間や先生にするときの仕方を知ることができる。 - 報告・連絡・相談をどんなときでも使うことで、上司や周りの人が気持ち良く仕事ができることや人間関係が良くなることを学ぶことができる。 - 作業がやりやすくなった。

3 模擬株式会社の取り組みの課題

(1) 会社としての意識付け

生徒によっては、会社意識が十分ではない場合があるため、社会とつながりがあり、発注先とのコミュニケーションが必要な「受注生産」を効果的に作業計画に位置付ける必要がある。

受注を増やすためには、今金町の「ふるさと納税返礼品」に学科の製品や開発商品を提供していく。

(2) 商品管理システムの運用の充実

学科の製品を製造しても、学校祭間際には「今養版商品管理システム」を運用できない場合があり、製造した後の商品管理という社会における一般的なシステムを学科作業に確実に位置付ける必要がある。

したがって、作業学習を単元化して、特定の製品を製造を終了したその都度、商品管理システムに登録して在庫し、販売会の前には出庫する作業を生徒が行えるようにする必要がある。

(3) 市場調査を踏まえた製品製造と販売会の実施

これまでの製品製造は、長年製造してきた定番商品を基本としているが、市場調査を学校祭の販売会ではアンケートの形式で要望を調査したため、これを踏まえた不特定多数向けの製品を製造、開発する必要がある。

(4) 新製品・商品開発の充実

生徒の実態の多様化を踏まえるとともに、地方創生を担う人材育成のため、関係機関と協力したコラボ型新製品や新商品の開発を継続して推進する必要がある。

(5) 他の教科と関連付けた教科横断的指導の充実

国語・数学等の教科学習は、作業と組み合わせた指導内容・方法となっていない。例えば、作業量の平均化に気付くことができるように、事前に数学で「平均に関する学習」を行い、作業学習で考える際の思考ツールや考え方を活用できるように、作業学習における課題と関連付けて教科の年間指導計画を作成する必要がある。

(6) 会社そのものに関する学習

会社の業務、商品管理、帳票、市場調査など商業ビジネスの基礎を作業学習のシラバスに単元として位置付けて作成し、指導する必要がある。

(7) 学科共通作業で環境整備や流通・サービスを行う学習の充実

校内での学習を行って業務に必要な技量を身につけて、目的や課題意識を明確に持った校外作業を行う必要がある。作業後は、可能な範囲で他者からの評価をもらい、目的の達成状況について振り返りを必ず実施し、次の学習や生活、学科共通作業の改善に生かす。

(8) 仕入れ販売の充実

仕入れ販売の目的やポイント、販売して利益を上げる過程が分かるような学習過程を組む必要がある。